

第1回山岳遭難防止対策検討会 委員発言要旨

日時：平成25年10月8日（火）

場所：県庁議会棟3階第1特別会議室

（節田座長）

事務局からの説明は以上である。これらについて委員の皆様からご質問・ご意見があればお聞きしたい。これから先の防止対策については第2部としてお話したいので、先ほどの現状説明について何かあれば。

（鈴木委員）

先程登山届が45.1%というデータがあったが、個人的にも山に入る機会が多いが、実感として45.1%というのは非常に高いと思う。たぶんこのアンケートに答えられた方が非常に意識の高い方が多かったので、その中で集計として、こういう数字が出てきたのではないかと。実態としてはもっともっと低いと思う。

（節田座長）

登山届は万が一事故が起こったあとの対応ということになるが、実際に現場で登山者をご覧になっている山口さんや、北部の松本さんは、現在の登山者の状況、専門家の目で見るとどんな風にとらえているか。

私としては、先ほど申し上げたとおり中高年登山というのは80年ごろから始まっているが、その頃日本の人口構成も中年が多くなり、退職後の余暇活動や中年からの過ごし方について考えるようになったのが、山にいたってきた一番の原因ではないかと思っている。

一口に中高年といっても、ずっと山登りを続けている方（＝継続組）、現役の時には仕事が忙しく、後年になって、あるいは退職して山に戻ってきた方（＝カムバック組）、50・60からはじめたビギナー組と、3つのタイプがあると思っている。

一括りに実年齢だけでくくってしまうと、実態を把握するとき間違ってしまうのではないかと。特にこの20年ほど、暦が変わって2000年以降中高年の質がさらに変わってきているように思う。そのような仕切りでどうか。

（山口委員）

先程座長からお話しがあった通りだと思う。中高年と言っても、ずっと続けて山をやっている方、一時期仕事へ入り、子供（孫）ができて、孫を連れて行こうという方も増えた。それから、始めるのが60過ぎの中高年の方がいる。3種類の方がいるが、それをひっくるめて全部中高年という形で我々は呼んでいる。

今涸沢も紅葉シーズンの真っ最中で、昨日も400人近くの登山者がみえ、その6割以上はおそらく中高年である。それも、ツアーで紅葉見物に来る登山者がかなり多い。この時期に山に上がる人（涸沢から上に上がる人）は1000人ぐらいで、キャンパーが500人ぐらいで、小屋泊まりが500人ぐらい。1000人ぐらいの方が登っているが、上の北穂や奥穂に登る人は1割か2割ぐらいである。

紅葉を見に来て、次の日に降りるといふ登山客や、ツアー登山客が圧倒的に多い。おそらく、登ってくる7割・8割はツアー登山客で、特にクラブツーリズムの登山者はかなり多い。

ただクラブツーリズムは、安全意識に非常に配慮しており、今年は夏山の前から、ヘルメットを150個ほど用意し、穂高方面・槍方面に行く方は全員着用と、横尾から上をかぶる。ヘルメットの話をして申し訳ないが、これは県警の方で（データを）出すのだと思うが、涸沢から上に行く人に対してはヘルメットの着用が非常に増えた。

頭を守るだけで命が助かるという話もするが、本当に増えた。ちなみに、1日行って帰ってきて1000円という料金で、レンタルをしているが、かなり増え、涸沢で貸しているヘルメットが恐らく7割8割、700～800ぐらいの数字が出ているかと思うが、一日1000円のうちの半分は保管料で500円は遭難対策基金の方にまわすと言うと、協力的に、私がヘルメットを借りるお金で遭対協へ寄付をしているのだという意識も、ヘルメットをか

ぶる人には出てきているのではないかと思う。

ヘルメットをかぶることによって自分の意識が、これから自分はやばいところに入るのだというのがかなり大きい。これをかぶることによって心が引き締まり、気をつけなければいけないのだと。何かあったら全部自分の責任だぞと。遭難したらお金かかるな、ということまで含めて、結構いいことだと山小屋をやりながら思っているところ。

(節田座長)

松本委員は、現状はどうか。

(松本委員)

現場で登山者や事故の状況を考えると、先ほど(県警の)山崎課長から話があったように、山には常に危険が潜んでおり、いろんな山がある。急斜面や岩場、浮石、滑りやすい草、いろいろな地形的条件がある。また、気象的な条件(雨、風、吹雪、気圧が低い・酸素が薄いなど)があるが、これらが重複すると山の危険度はさらに高まる。

もう一つ、本人の危険度(知識、体力、装備、食糧、登山技術、リーダー・パーティーシップ)もあり、そういった条件が3つとも重なると、遭難事故が発生すると思う。いかに地形的条件の下調べ、天気予報を調べ対応する、トレーニングによって山に対応するなど、そういった認識が必要だと思う。(登山者)本人が認識しながら登れば遭難は少なくなると思う。

先程の岳の10訓にあったように、ポスターの作成など啓蒙的な登山者に対する危険度の予告などもアピールしながら、今後はゆとりを持った登山となるような計画を立てていければ遭難は少なくなると思う。

(節田座長)

山岳総合センターなどのデータもあるが、八ヶ岳のほうはどうか。

(高橋委員)

登山届の提出状況ということになるが、八ヶ岳は通常警察署へ提出するが夏の繁忙期は登山口にボックスを設置しており、歩道に出て様子を見てみると、しっかり用意してくる人・指導に従い地区で作っている登山届をその場で出す人を合わせてかなりの数だと思われる。通常時期は指導をしているわけではないので、どのぐらいの数かといわれると難しいが、登山届の作成・提出は登山のスタートのところなので、その辺りも考えて啓蒙や指導をすることにより、事故につながる要因の排除につながるのでは。

(節田座長)

八ヶ岳における登山者の現況や様相はここ20年~30年ぐらいで変わっているのか。

(高橋委員)

八ヶ岳の場合はアプローチが近いということがあり、どちらかというところと初心者が多い。八ヶ岳へ行ってその後北アルプスへ行こうという考え方の方も多いと思う。

最近では中高年がコンスタントに来るが、若い人が増えている。冬場も一部が夏と同様のアプローチで山へ入っていく者もあり、そういうところに危険もないし、いわゆるビジュアル的な部分で入っていられる方がいるというのが最近危惧するところである。

(節田座長)

個人的な意見だが、山岳総合センターのデータは非常に興味深く読ませてもらった。登山者の様相が変わってきている。特にデータの3番目であるが、八ヶ岳や中央アルプスは30代以下の若い人たちが半数近くになっている。その辺り、宮本委員はデータ収集をされて、プラスアルファで何かお考えになったことはあるか。

※(宮本委員)→(杉田所長)へ

八ヶ岳と中央アルプスにおいては、年齢層以外にもほかの山域と様子が違うところがある。中央アルプスはデ

ータをとった場所が1か所だけ(千畳敷の駅近く)で、八ヶ岳は美濃戸口バス停の前の1か所。年齢が若く、保険加入率もこの2地域は低い。そういったことも含め、手軽に入れること、気軽に日帰りで行ける山というといった方が多かったからであると感じている。

(節田座長)

宮本委員は、センターで講座をしている中で、どんなことを感じているか。

※宮本委員 → (杉田所長) へ

年間で1,000人ぐらいの受講がある。詳しくはカラーのパンフレット資料をご覧顶きたいが、やはりアンケート同様経験の浅い方が来られていると感じている。山岳会に入っていない方がほとんどで、昔は山岳会に入りいろんなことを習ったと思うが、今は山岳会に入りたくないという人がアンケートでも半分以上。

山岳センターの受講者のみのアンケートも同様の結果が出ており、組織に入りたくないけれども知識は身に着けたいと思う方がセンターに来られるし、一般登山者も同様である。

(節田座長)

その数というのは近年増えているのか?

(杉田所長)

近年というのが、昨年から指定管理をはじめているので1年しかデータはとれていないが。

(事務局：茅野スポーツ課長)

山岳総合センターは昨年から指定管理をはじめたが、それまでの受講状況をみると、指定管理になってから講座数・受講者も飛躍的に増えている。

アンケートについて、八ヶ岳(美濃戸口)はもともと地域の中学生が多いため、20歳以下の回答者が多いのはそういう(中学生の登山者が)方々の記入も相当数あるからではないか。

(節田座長)

東さんの方では何かあるか。東さんのところは指導者向けの講座が多いと思うが。

(東委員)

私どもは指導者向けの講習が多いが、登山研修所に来る研修生もかつての社会人山岳会の指導者という方もいるが、地域の体育館等で野外活動をするので山の知識を学びたい、また仲間で新たな山岳会が出来つつあり、仲間内で危険なので、自分たちで組織を作り、代表者を決めて受講を認めて下さい、ということで参加を認める例もある。

登山雑誌の社会人山岳会の募集欄を見て頂ければわかるが、かつては4月時点で100~200の募集数があったが今は20程度で10分の一ほどになっている。

かつての社会人山岳会は地道に活動しているところ以外は新規募集をしていない。今の登山者は雑誌や仲間同士での体育館などで行っている野外活動から山へ登っている。

また、日本人の特性かもしれないが、雑誌等でのステップアップする記事を見れば、ステップアップをして高みをめざしたいという心が働いているようである。山岳総合センターでの講師研修会で講師を担当しているが、昨年バックカントリーの講座に来ている方は、夏場はある程度の山の人ではないのだが、バックカントリーの安全をはかるために参加したという方がずいぶん多かった。新たなスポーツの取り組みに対して若い人が敏感になっている、そういうことで未組織登山者が多くなっているのは数字が示すとおりだと思う。

個人的な感想だが、アルプス(立山をふくめ)は中高年だが、奥秩父・冬の八ヶ岳に関してはほとんど若い人が多いのではないか。美濃戸口等は別だが、権現岳や阿弥陀山周辺は個人テントを持って冬に来ている姿がある。そういう人は、次は北アを目指すのでは。

相対的には都会部の若い人のブームが定着をして、その人たちが新たなステップを踏んでくる。それに対する

対策を考える必要があるのではないか。

(節田座長)

東さんのいう通りである。鈴木委員は実際に商売としてやっていて、お客さんの様子はどうか。

(鈴木委員)

二つの立場でお話しをしたいと思う。まずは旅行会社としてだが、講習の話も出たが、登山ツアーにおいても従来の一度きりの登山ツアーもあるが、それ以上にステップアップ型（登山教室 5～6 回シリーズで最終的に目標とする大きな山に登る、技術的な 1 つの段階を達成するというシリーズ）がここ 3～4 年で非常に増えているし、お客様からも支持をされている。

こういうツアーは週末絡みだと若い人（30 代～50 代）が増えている。（クラブツーリズムの）一般の観光ツアーでは 60 代～70 代がメインなのに比べ、登山に関しては一般の観光よりも若い人が入ってきている。従来であれば山岳会等で勉強したはずのものが、組織でしぼられたくない方が勉強する場の 1 つとして、旅行会社のツアー登山育成型（ステップアップ型）に来ている。

また、登山者としては、個人的に 2 つの山岳会に入っている。世の中の山岳会の 7 割以上は 60～70 代が中心であり、そういうところに若い人は入らない、入りたくない。

わずかではあるが、若い人が中心での山岳会や幅広い層がうまく成り立っている山岳会には今でも年間 30～40 人が加入している。

そういう山岳会はネット・会のホームページで公募、また独自に講習会等を実施、その報告を載せることにより、一般の方が集会等に来る。そういった山岳会は、数は少ないが細々と存在しているので、問題はそういうところにも入らない未組織の方への教育・啓蒙をどうしていくかだと思う。

(節田座長)

おっしゃる通りだと思う。一番の問題は未組織登山者をどう指導するか、どう勉強してもらうか。長年の課題であるが、昔は「山と溪谷」「岳人」のようないわゆる登山雑誌がかつてはカバーしていたが、残念ながら今の人たちは本を買わない。

レジャー白書によると、登山・ハイキング関係人口は 1 千万人だと昨年発表されていた。残念ながらそこまで本が売れているわけではないので、その分がネットに流れているのではないかと思う。

トムラウシの調査報告で、登山者自身はもちろんのこと、ツアー会社に対するお願いを調査委員会として書いた中で、ただお客を集めて連れて行くだけではなくて、かつての山岳会に代わるような指導的な意味の旅行でありツアー登山の商品を売っていただきたいということをお願いした。それをクラブツーリズムさんが実施してくれており、非常に心強い。

羽根田委員は、実際の遭難事故取材を通じ、感じる近年の登山者像について何か思うところはあるか。あるいはここ 10 年の変化のようなものは。

(羽根田委員)

最近感じるのは、山はリスクがあるところは間違いなく、そのことを認識している人は認識しているが、問題なのはそれを認識していない人。例えばテレビの登山番組や雑誌などを見てきれいだなと思って行ってしまう。

また、今まで危険な目に遭わずに山登りをしてきた人は、いざ危険な目に遭った時対処できない傾向にある。北アルプスの稜線では、少しつまずいただけでも転倒・滑落で死亡するところもあり、厳しいところでなくとも樹林帯の中での道迷いや、前の人が起こした落石に当たり死んでしまうこともある。そういったリスクを認識することが大事なのに、残念ながら認識できていない人が多いのではないか。

先程から登山届を出すような人は問題ないが、出さない人をどう教育していくのか。リスクをまだまだ認識し

ていな人が多いとみられるので、その辺のところをどう啓蒙するかが課題ではないか。

(節田座長)

以上、これまでの登山者の状況についてお話をお伺いしたが、これまでの部分について、何か質問は。

(委員) (質問なし)

(節田座長)

それでは、現状認識から先に進みたいと思う。今まで長野県としても様々な防止対策をとられてきたわけだが、これに加えてどんな新たな防止策を打って行ったらいいのか。これから先のことに関して、みなさんの意見をお伺いしたい。

事務局として、さきほどのいろんな施策の中で特に強調しておきたいところはあるか。たとえば大都市圏での安全登山セミナーの開催というのは、具体的にどのようなことを行っているのか。

(事務局：浅井観光企画課長)

遭難者は県外の方が多く傾向があるので、県外での、特に大都市圏での発信を強化することの一つとして、安全登山セミナーというのを今年度から行っている。登山用品店とタイアップし、そちらでたとえば会員向けのフェア、こういった場所に安全セミナーを開かせて頂き、そこでの啓蒙を本年度全体で6回ほど実施している。

(節田座長)

場所は？

(事務局：浅井観光企画課長)

首都圏が3回、大阪が2回、仙台1回である。

(節田座長)

お客さんの反応は。

(事務局：浅井観光企画課長)

実際に県警の遭難現場の話を見せて頂いている。そういう情報は一般の方はほとんど見ることがないので、非常に驚きをもって、場合によっては立ち見があるほど集まっていたという状況。

(節田座長)

他に何か強調しておくところは。岳のPRは非常にユニークだと思うが。

(事務局：浅井観光企画課長)

工夫してやっていることと言えば、県だけではできない状況のため、民間の方の力をお借りしている。または、登山者が集まる場としての、登山用品店の活用を今年から実施している。

(節田座長)

実際に登山用具店の方は忙しいと思うが、どの程度協力してくれているのか。

(事務局：浅井観光企画課長)

三步の山岳通信というものをお配りしたが、お話をかけると非常に好意的に活用して頂いている。

(節田座長)

こういったリアリティのある啓蒙が一番効果的かと思う。いわゆるお役所的なお題目では登山者は読んでくれない。興味を引くようなしかけが必要である。

特に大都市圏、長野の山へ来るといって東京・横浜・千葉・埼玉・大阪・名古屋は登山者が多い地域と思う。キャラバンを定期的にやって、リアルな話をするのは効果的かと思う。登山講座を開いても全てにはいきわたらない。山岳会には正直にはあまり期待できない。

それでは今現在出ている対策についてさらに強化をするようなアイデアやご意見があれば。

(山口委員)

まず、今年から実施した、岳チラシやのぼり旗を持って、元スポーツ課長の原さんが山岳推進員という形で横尾の避難小屋前に夏山の週末来、キャラクターのついたジャンパーを着込んで呼びかけを行った。これは数字には出ていないが、かなりの遭難防止になったと思う。夏山の終わりに秋山でも実施していただくよう要望したが、兼ね合いがあって実現しなかった。これを1人ではなく、若い人も登ってくる人も増えているので、是非県としても充実をして頂きたい。

また、今日山岳遭難防止アドバイザーという方が3名、羽根田さんもそうだが、県警救助隊OBの中嶋さんと緑川さんがなっていたが、これからの活躍の場を(考えるべき)キャンペーンキャラバン等を行うなど、任命はしたが、どういうところで動けばいいのかということを考えるべき。

防止対策で一番効果的なのは水際作戦だと思っている。登山口でそういう人たち、腕章をまいた人たちがユニフォームを着て、登山者にアドバイスをすることが非常に効く。そのようなことを今後考えて頂いて。

夏山常駐隊の夏山常駐期間をもう少し伸ばしてほしいという話があったが、今常駐期間は7月の20日頃から入って8月の中旬には下山で、40日しかない。この辺も予算を増やし、夏休み8月いっぱいまで登山者は絶え間なく来るので、常駐期間を伸ばしてほしいし、山岳推進員、防止アドバイザーの方々をうまく利用して水際作戦を、大々的にやっていかななくてはいけないと思っている。

(節田座長)

(資料6の説明が抜けていたので)資料6の説明をして、論点の整理をお願いしたい。

(事務局：浅井観光企画課長)

新たな遭難防止対策の論点についてということであるが、現状や課題から見て、防止対策にどんな論点・視点があるのかということで、例示という形でこのなかでまとめさせていただいた。

これ以外にもたくさんの視点があると思うので、頭の整理というか、参考までにこのような形でまとめた。

(松本委員)

大都会でのキャラバンについて、過去を思い出すと、以前松坂屋で夏山相談所を開催していた。山小屋・地元遭対協・ガイドの方と都会の人で相談所を開いていた。最近やっているかどうかわからないが、ぜひそういった形でやって頂ければと思う。

それから、やはり地域での直接指導が一番大事ではないかと思う。

自分をはじめ遭対協のメンバーも、白馬の場合は五竜のゴンドラ駅・八方の駅前・猿倉の大雪溪や梅池の入り口に相談所を設けてやっているが、なかなかこれから登る登山者にあまり細かいことまで聞くわけにもいかない。その辺をもう少し充実させたらよいのでは、と思う。

自分も常駐隊を10年ほど若いときにやっていたが、小屋での指導が的確で非常に効果があると思っている。

なお、白馬村としても観光局HPで「山岳情報」を入れ、具体的な情報を発信している。そういった情報を各市町村HPの山岳情報として入れてダイレクトに見られるような形をとればいいのではないか。

(節田座長)

その他何かあれば。宮本さんは、何か一言いかがか。

(宮本委員)

今の登山(者)がかつてとかなり変わってきていることはわかっている。もう一つ、これらの議論の前提として、登山者や遭難者数の数値が出ているが、これらについてもある程度の同じ認識を持つ必要がある。

未組織というが、組織の方は全国的に見て、ものすごくサバを読んでも20万ぐらい。(実際には10万ぐらい

で、2倍ぐらいにしてもその程度で) そう考えると、登山者のほとんどが未組織登山者。それが多いとか少ないというのは、認識が違う要素が出てくるのではないか。

ここ3~4年毎年1割くらい登山者が増えている。そういうことでいえば、当然事故者も増えているが、その割合はそうはとびぬけていない(事故者の割合が増えているわけではない)。そのあたりもどのように思うのかというところ。

また、中高年の問題が出たが、同じ年齢層でも3種類くらいある。厳密に対応するとすれば、どの辺が多いかということは重大問題である。そういうことを、みなさんのお考えがあればもう少しお聞きしたいし、聞いてみて頂ければと思う。

(節田座長)

おっしゃる通りで、中高年と一口に言っても、それぞれ対処法が違う。その辺りも吟味しなくてはならない。

内野委員は、外国人の問題について何かあるか。

(内野委員)

まず自己紹介をさせて頂きたい。私自身は諏訪に生まれ、20代後半には八ヶ岳の小屋にいた経験がある。遭難事故はそのころが一番身近であったと思うが、そのあと結婚・出産を経て上高地の日本山岳会の施設で約9年間管理人をしている。八ヶ岳にいたころ、短期間韓国へ留学した時期があり、その頃から韓国語を勉強していた。

9年ぐらい前上高地に入った際に、韓国人登山者が多いことを実感。そのときは韓国語の練習ができると思っていたが、そのうち危機感を感じた。具体的には、(登山装備が)季節はずれであったり、日本の山小屋関係者からの話(山小屋への到着がとても遅い、過度な飲酒、深夜まで起きているなど)だが、上高地において小さな日韓摩擦が生じていると感じたことから、韓国人向けに韓国語の(日本の山岳情報を発信する)HPを作った。

それ以外にも、韓国の山岳雑誌に記事を掲載し、北アルプスの山の基本的なところを理解するような記事を連載・単発で書くなどしている。加えて上高地インフォメーションセンターでの登山情報の翻訳や張り紙等を実施している。実際に韓国へ赴き、山岳雑誌や旅行社等を訪問し関係者へ直接話をするこも。

上高地における韓国人登山者についてであるが、10年前位から登山者はおり、年々増加していた。震災で一時的減少したものの、去年今年には震災前まで戻ったのではないかと思う。

10年ほど前は季節もルートもバラバラであったが、最近では定着している。主には、7月中旬以降9月のはじめまでで、上高地-槍ヶ岳-大キレット-奥穂高岳-前穂高岳-岳沢のルートがほとんどを占めており、そういう意味では涸沢は少し減ったのでは。

もともと韓国の方は登山をしており、ブームによって登山者が増加していた。韓国国内は2,000m級足らずの山が多いので、物足りない人が海外に出る・国内でも一般縦走路ではない登攀ルート(岩稜ルートと呼んでいるが)などのコースを好んで行ったりしている。

詳細については後程資料を見て頂きたいが、韓国人は日本の登山文化を韓国の文化と似たような文化だと思いをこんでいるところがある。韓国特有の登山道管理と似たようなことが日本でも行われていると思っており、具体的には、登山口では入場料をとる、登山道の立ち入り制限(3~5年の単位で実施される「自然休息年」、春・秋に実施される山火事防止のための制限【入山不可】)、台風・大雨など気象条件による制限)があるなど。

中央アルプスの遭難事故において、韓国の関係者が入山を規制したらよかったのではという発言があったようだが、その発言にはこういった韓国国内の経緯があったのではないか。

(写真資料について)これは自分が登った時のものなので、現在はもっと整備が進んでいると思うが、滑りや

すい岩のところには手すり状のものをつける、平易な場所にも歩きやすい道を整備するなど、日本の登山道とは整備の仕方や考え方がまったく違う。

花の写真があるが、これは5月の終わりごろの韓国の山（チリ山）の写真である。5月の末でつつじが満開であるなど、季節的なギャップが大きすぎるために、（日本での）気候が想像しがたい状態で日本の山を訪れている方も沢山いるのではないか。

国立公園の中の山の中には山小屋があるが、国立公園管理公団が管理しているものであり規制が厳しい。チェックインの時間が午後4時から7時までの間であり、これが常識になっていることから、かえって日本の山ではや立ち早着きという言葉を使う際にも、具体的に何時であるとか、誤解がないようにする必要があると思う。

（節田座長）

東さんは資料をお配り頂いたようであるが、何かあるか。

（東委員）

内野さんの言う通りで、要するに情報不足であると思う。かつて日本人がヨーロッパアルプスに登った時は日本人はカミカゼ登山隊と呼ばれた。これはヨーロッパの登山スタイルを知らず、ヨーロッパの常識が分かっていたため、それを理解した現在は非常に優秀な登山をしている。韓国の方にも、良質な情報をどんどん提供すべき。未組織登山者の方も、より良質な情報な情報を提供すべき。

雑誌に、日本の山でなぜそんなにはや立ち・早着きなのか、もっと山を楽しんだらよいのではないかというアウトドア視点から書いているライターの方がいるが、日本の山、特に3,000mの稜線になると、雷雨が発生する、雷が当たる可能性が高くなる日本の山特有の気象条件による。ヨーロッパであれば（オラージュという）嵐が来るのは天気予報でわかるが、それを押さえておけば恐れる必要がない。

そういう点で韓国の方に、日本の登山の習慣の違いと特性・積雪期の登山常識的なルートなど、セオリーを教え伝えなければならない。

（韓国国内の）雪崩に関しては、150m～200mの大氷角ができるが、雪そのものは20～30cmでほとんどが樹林帯。先日から国立公園管理公団の救助隊の方と合同研修を行っているため、機会があればどんどん情報を伝えたい。

しかし、一般の方は情報不足で、山雑誌を見ているが、ほとんどはインターネットで情報を得ている。ガイドブックも数が多くなく、地図も概略的であるが、それで足りる。500mおきにQRコードのついたポストがあり、携帯電話ですぐかけられる。電波の状態がよく、携帯電話はほぼつながる。韓国の方が山の中に対し持っている常識に対して、日本の山はこういうことだと明確に情報発信をする。日本の登山・山岳遭難の特性もきっちり教えるような体制を整えるというのは大事なことである。

（節田座長）

おっしゃる通り、かつてはヤマケイの夏山のガイドブックのコピーが真冬の槍沢に落ちていたという、季節感というものが理解されていないと思う。

話し足りないこともあるかと思うが、予定の時間が近づいてきたので、今日お話のあったことを事務局で整理して頂くが、先ほど登山規制の問題があったが、これは微妙な問題を含んでいるため、次回改めてご意見をお伺いしたい。

その他何かあれば。

（加藤委員）

先程から、新たな遭難防止対策ということで、山口隊長がおっしゃったことに同感。羽根田委員からも出されたように、リスクを認識してもらうことが一番大事で、それには現場や水際が一番効果があると思っている。リアル感をもってリスクを認識してもらう方策が一番強化すべきところだと感じている。

今年の横尾でも、私も何人かにヒアリングをしたが、現地で何が一番意識的によかったかという、数日前に自分の行くコースで死者が出ているのだという認識が非常に効果があったという声があった。

横尾についてはおそらく長野県で一番登山者が通っている場所で、そこで声掛けができるというのは効果的で、そこで拡大・強化をしていくのが一番有効だと考える。

もう1点、常駐隊については夏山だけではなくて、現在でも遭難が多発しているし、9月やほかの期間も対応できるような、予算立てについてご尽力を頂ければと思う。

あえて申し上げるのは、予算的には遭難者が増えている中で、地区遭対協の予算が少しずつ減ってきていたという過去の例があるので、事務局では努力をしていることと思うが、長野県としても大局的な予算強化に引き続きご尽力を頂ければ有効な手立てとして効果があると思う。

もう1点、韓国人の問題がクローズアップしているが、現場を見ている中では北アルプスでは欧米の人も増えている。天気の良い時でよくかえって来られたと思う方も多くみられるので、大きな事故が起こる前に問題視をしておくべきではないか。

(篠崎委員)

具体的な意見は次回申し上げたいと思うが、資料6で論点について整理をして頂いた。ほぼこの論点の形に議論がまとめていけると思うが、今回の山岳の中であえて加えて頂きたいのは、特に外国人と、登山だけではない山岳の利用である。これまでは登るための山の議論が中心であったが、東委員からバックカントリーの話があったように、外国からのバックカントリーが白馬でかなり問題になっていて、山岳の遭難事故に必ずやつながってくる危険性をはらんでおり、行政としても問題視をしている。

冬のインバウンドを進めるうえでこの部分の整理をしなければならないというところに、できれば有識者の方々から議論をして頂ければありがたいと思っている。

(節田座長)

確かに、特に欧米人にとっては日本の山はウォーキングの世界。アルピニストとハイカーと区別をすれば、彼らにとり日本の山はアルピニズムではない。恐らくどこでも歩きたがるので、それなりの対応をしていかなければならない。

気象変化に関しては、今も厳しいところがあるので、いろいろな人が登りにくるのではないかと、ましてやオリンピックに向けて他国のアウトドア志向の人が増えることが十分に予想されると思う。

これは杞憂であればよいが、トレイルランニングが非常に増えている。北アルプス稜線でもトレイルランニングがいるが、いわゆる山の世界とどう住み分けるのかということも問題になってくるのではないかと考えている。

時間がきてしまい、なかなか煮詰められないところもあったかと思うがそれらは次回にまわすこととして、この辺りで終わりにしたいと思う。

事務局から次回の連絡は。

(事務局：山本観光企画課企画幹)

今回は10月29日(火)を予定。詳しい会場・時間については別途お知らせする。